



# NAKED EYES KOHSHIN SATOH

PARADE 2000

INTERVIEW: KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH: TOSCIO TOMITA



飽きることで大事ですよ。自分が活性化される。

「お前は今日まで、他のために服を創ってきたか」  
薄暗い照明の下、エイリアンに云ふさまうを感じておぼや。外国人にしては小柄で黒い肌  
にギョ目目が鋭光ついている。ジョークを思いきり真面目な表情は緊張の空気を張りつめさせた。  
フィッシュテイルを穿き、段ボール箱を肩で担ぎ、その中に手にした佐藤の服を次々と  
乱暴に投げ入れていく男の台詞である。一万ドルの大金を賭して男との出逢いは、今風の  
あつた。ジャストラベーターのアイリス・デイズはその後、彼に映画、舞台の出演衣装はも  
ちろん、グランド・オールド・ファッションの衣装もオーダー続けた。そして祭りの果てはワールド・オブ・  
の舞台で自らを依頼するまでに、佐藤の感性を賞賛し、信頼していたのである。

同様にNYコレクション以来の愛用者であるポップ・アーティストのアン・テイ・ウォール  
は、他界する直前の日記に「パーティウエアを前に合わせてくれなかった佐藤への小言を記して  
いる。世界の第一人者にして相違ないものを彼は備えていることの証明であろうか。  
世界で活躍するトップアーティスト達の心を射止めた彼は、憤りはあつた。一九七五年に  
設立したアーティスト・ボウ・シエが十年の歳月を経つ頃には、ついにD・J・ブランドアイム、そ  
の全盛期。六本木では五メートル非非と、ボウ・シエのファッションに負けよう有り様で  
あつた。ナイトシーンでは、服装チェックが厳しく、カシエールでは、入店できない店がブーム  
となり、黒服というコトバがもて囃された。テクノカット、ハウス・マスカンという新語とと  
もに、思つてのファッションは、ガラス族という流行語を作つた。  
「あれじゃ違う。他の作つた服の方向とは」売上げの増大は複雑な感情を彼にもたら  
していた。

彼のプロフィールには、おおよそのトップデザイナーの経歴と同様の栄誉ある足跡が記され  
ている。甲斐崎育ちの彼は、服飾学校を経て、メンズウエアの会社に営業活動をした  
が、独学でファッションデザイナーを修得していた点である。隠れた努力もあるのだろうか。  
彼の口を切るのは、後述する手塚伸也との遊話である。

一九四八年、富田で生まれ、上京後就職するまで、カウンターカルチャーの時代を新境地を  
び、ファッションリターゲルとして、たまたま好意をもつと冒険しようという観念が今日の佐藤の  
スタイルを創つてきたと言ふ。ペアルックは絶対に着なかつたという佐藤の前に腰すくも。

■ アーティストボウ・シエの異常な種の流行は終わらなかつた。取捨しないか。

彼は読者人じやない。創りたいものを創る。分析したな、コンセプトとかターゲットと  
いうのは大嫌いなんです。つまり、自分が着れるか着たいかという発想。自分の女に着せ  
たいかどうかの着眼でデザインする。ただそれだけです。世の中の方向が違つても方向へ行  
つてただで、他のやつてくることはもうつと変わらなかつた。食えてりや充分だよ。  
デザイナー仲間からは「佐藤さんのモノ創りの姿勢は動物的だから黒人的発想だ」と  
言われまふよ。アイリスやウォールは、「これは西洋人が創る服でも東洋人が創る服でも  
ない。無国籍で何人が創つたかわからない服だ」と。どだい、多数の人に向けて仕事  
をしてないから、そもそも黒服なんて流行が異常なんだよ。  
勿論流行り残りは時代に対する区発なんだから、当然の出来事ですよ。

■ あなたの成功つて何なをすか。

売れるものを創ること成功じやない。成功つて結果としてお金を儲けることでもない。  
お金はついてくる副産物にすぎないよ。何が自分に光つてくるかが大事なんだ。光るものを  
探して追つかけてる。それがバツと閃いたときは喜びだね。その閃きが踏み台になつて言  
だるま式に大きくなっていく。形になつてもパーフェクトじやないから、またまた追つか  
ける。三〇代もまだだつたよ今もまふ。ということは年老いても変わらないでしよう。

■ 新新装をサイフに言うのは、どういう意味ですか。生き方に通ずるのかな。

もう服には一〇〇%新しいものはない。出尽くしよやつた。何が新しいかと云うより、  
人と違つようにはするしかない。とにかく、人と同じなのは嫌いなんです。  
元來、服つて飽きるもんなんです。飽きるところで大事ですよ。それによつて自分が活  
性化される。服を穿き替へることで気持ちや姿勢も盛り上がることを経験してるでしょ。マ  
ンネリの人生へのカンフル剤になつてくるのが、ファッションデザイナーと言ふかな。服師  
は人生においてその人との二人三脚みたいだ。だから飽きまふ愛して、愛し合つて身につ  
けてもらいたい。そして次のステーションへの衣装に執着するといふ。デザインした服がそ  
うして、そういう人の内を生きて欲しいですよ。心に新しさを吹き込むことが必須だ。

■ 文明は多様化するが、人がどんを画一的に真ま世の中にヒトコト。

ストリートへ出ると、もう服が立つよ。みんな同じ様な趣味してるから。何が流行  
つても一辺倒。今もまだ日本は島国なんだな。右向け右で團圓に右向いてしまつている。  
気が付くと今度は何んなで左向いている。いろんな人種が集まつてる大陸型の価値観の  
ように、徐々に熟していきはくんでね。老いも若きも口では個性個性つて言いつて  
個性的な少数派を尊重するにはまだ途上国だし、冒険する強勇もおつたかむつくりで反  
び腰に見ざる。ファッションも思想が相通じると思ふんだけど、区発する生き方があつて  
こそ新新装や自由さの証なんですよ。提案提供されるものは確かに選択肢が増えきてい  
る。しかよ決めるのは君達だ。

■ 自慢満々に纏りなななが、動機つては上手い女ですか。

全然ダメですよ。正直言つて、人に好まは褒めることはできないし、良かった良かった  
や何も進めないタイプなんです。評判の良かったファッションショーでも、やつた思つたら  
終わらなかつた。もう次に頭が切つてしまふんです。自分を良かったは思ふなないんです。ますか  
つた部分しか追求しないんだ。悪かつたところを取り上げて、自分を大きくしていく欲  
すね。ショーはアーティストに見せろめつてもないし、観客に見せろめつてもない。やはり  
自分と関つてくるという観が強いんです。そういうところ、日本人なんです。

佐藤のシネガレ声の張りに、ついでレコードデビューはしないのかと尋ねた。一九九〇年に  
Dデビュー。アドソンを世に出したマーク・カミングが曲を書いて、佐藤が自作のボエを朗  
読するといふ企画だつた。NYのクラブ系での録音と聞いて、面白うたからぞうと、その  
場のノリで決めななな。「聴き生まなないよ。楽しけりやいんだ」と連発しながらも、カ  
ウンターカルチャー精神を忘れずに生きている羨ましい限りの男であつた。三子の頃、兄弟の  
お下がりの服はつたかつたので、新しい服へのコンプレックスが今の自分であること話して  
くれて、何故か親近感を感じて嬉しかつた。

(敬称略) 文・五所光一郎  
写真・富田敏夫

# 佐藤信